
きみのいない物語

乙未七菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみのいない物語

【Nコード】

N1071U

【作者名】

乙未七菜

【あらすじ】

この世界から欠けたきみについて、僕のつたない想像力だけでは怯えているしかなかったはなし。

夜は、潜るように息を止めて眠りを待つ。

意識が遠のくほど呼吸を止めて、ぼくそのものを一時停止させて、思い出せないくらいに世界の針を止めて、五感の最底辺まで下る。

無音ですら聞こえるくらいまで来た頃、ようやくやさしいなにかに触れるように、波のような眠気がぼくの意識を受け入れる。

A M 4 : 0 0

見なくても知っている。夜と朝のはざま。

薄い壁越しに聞こえるエレヴェータの音が、もういい加減しなくなつて、やっとこのマンションの住人の一番最後に眠りに就く。5階建て。よくもまあ、エレヴェータつけてくれたもんだ、という規模。ぼくの部屋は3階の一番端で、おりてすぐ右隣。青と緑の間の色をした扉。

カーテンは、閉めたままで。

ベッドの上にうずくまっている。うすい青色のブランケットは姉が誕生日につけてくれたものだ。「あんたそんながりがりで冬寒くないの」って、毛布くれるんだったら、ヒータとか、なんかあるだろ、だなんて思うけど。

寒いよ。

ヒータがほしい。

空っぽの冷蔵庫がうなりをあげる。震えるように、冷氣を送り

出しているのだろうか。なにも入っていないのに。じゃあなんで、ぼくはそんなものに電気をつないでいるのかな。よくよく考えればおかしい話で。

たぶん、冷蔵庫にコンセントつなぐ程度には普通の人ですよって、しょせんポーズでしかないのかもしれない。なにかの間違いで誰かがそれを見たときに、ぼくは普通だと信じ込ませることができるよう。

もう少しすれば、どこかの階の誰かの部屋で洗濯機が廻る。

理由は至極簡単で、きつとさっきのエレヴェータで、誰かと上がって行っただから……。

きつと、気づいていないだろう。

もう少しすれば、ぼくの今日が終わって、かんたんな眠りの果てにぼくの明日が始まる。水の底、潜水するように空気から視界を奪って、次に息をつくときには、もう感覚が思い出せない。

その間、ぼくはひそやかに手足を動かして、進む。回転する針の上、時間という概念をまわして。

新鮮で透明な青の奥底の色は、深い濃紺の帳の端の色と少しだけ似ていると思う。星だけが欠落しているのみで。

ゆっくりと歯車が動く。

なにかが回転している。蠢いている。

ぼくは真夜中と朝をつなぐように、ゆっくりとまどろみの上で船を漕いでいる。

冷たく凍るような夜に。

きみのいないこの部屋で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1071u/>

きみのいない物語

2011年7月9日12時18分発行